「学生時代と『今』」

小林美穂
人間学類第17期卒業生

大学時代は思い出の中

筑波大学を卒業してから、もうすぐ10年目を迎える。この文章を書くに当たって参考のためにいただいたバックナンバーをめくってみると、かつては身近だった名前がいくつか載っていた。そうか、彼女は大学院へ進み、今は技官になっているのか。当時は助教授だった先生が、教授になっている。大学の専攻から、着実にキャリアを積み上げている人々。「つくば」という地でも、時が流れていたことを実感する。当たり前。けれど、4年間を過ごしただけの卒業生にとっては、大学での学問は現実と乖離し、「つくば」はいつまで経っても「学生時代」で止まっている。

私の「今」と「学生時代」がどうつながっているのか、10年を契機に、考える場を与えられた。

心理学を専攻する

私は現在、茨城県で「心理判定員」という仕事についている。県職員の端くれである。「心理判定員」とは、県内の児童相談所や病院等において、心理検査や相談を行う仕事である。

人間学類の心理学主専攻を卒業したのだから、心理の仕事に就くのは当たり前、ちゃんと大学時代と今がつながっているではないか、と思われるであろうが、それでは話が終わってしまう。

当時、心理学を専攻したからと言って心理の仕事に就けるのはほんのわずかな人であった。多くは一般企業に就職し、心理学は大学時代の思い出として胸のうちにしまっておくのであった。本気で心理職を目指そうとする人は、修士や博士課程に進学する人が殆どだった。

まあ、文系の学生の一般的な流れと同じである。ここ10年くらい、心理学は非常

に人気のある専攻となっており、「カウンセラーになりたい！」と思って大学に入るものの、簡単にカウンセラーとして就職できるわけでもなく、学んでみれば一般のイメージと違って心理学って思っていたほどおもしろくないわ、ということで、もうちょっと楽しそうな業界へと就職先を見つけていくのである。勿論、筑波の学生はもう少し真面目に取り組んでいたが。

私の場合

一応、真面目な学生の一人だった私は、授業にはほぼ休まず出席していた。しかし、それ以上に真面目に取り組んでいたのはサークル活動であった。卒業した当初、自己紹介で「筑波大学第二学群人間学類出身」ではなく「筑波大学○○楽団××パート出身」と口をついて出そうになって慌てた。わたしのアイデンティティは「心理学」よりも他にあったのに、こんな専門職に就いてしまってよかったのだろうか？

そもそも、それを自覚していたから、就職のことは大学院へ進学してから考えるはずだった。心理職に就くということは臨床（カウンセラーや相談員）か研究をするということで、そのためには私の知識や技能は不足していた。もっと「使える人」になって社会に出て行く予定だった。

それなのに、何を思ったか突然仕事がしたくなり、就職することにした。心理職としては「使えない人」だから一般企業も考えたが、急なことなので就職活動のやり方もわからない。会社案内などを見ても興味が湧かない。やはり、やりたいのは心理の仕事なのだ。大卒でできる心理職は、公務員くらいしかなかった。

とは言うものの、公務員の心理職も採用が少ない。付け焼刃の勉強で国家公務員レベルの試験も受けてみたが、合格するはずもない。地方公務員も、どこで採用があるのか、調査不足で見当がつかない。結局、研究生として大学に残ることにした。

ところが、年度末の2月、児童相談所へ見学に訪れると、茨城県で心理判定員の採用試験があるという。早速書類を用意し、受験した結果が今につながっている。

心理判定員の仕事

こうして、採用試験の存在を知ってから2ヶ月で就職が決まり、配属されたのは、児童相談所だった。そこでは、養護児童（家庭環境の問題や被虐待で施設へ入所する子ども）や非行少年、不登校児との付き合いがあったが、一番頭を悩ませたのは障害児の判定であった。

初めて会った2、3歳の子どもが、知的障害かどうか、その程度はどの程度か判定する！ど、どうしよう。そんなことできない。

採用試験の面接では、すぐに何でもできそうに答えていたが、そんなはずはない。いくら真面目に授業は受けていても、そこに生身の子どもがいるわけではないのだ。まして、これは心理学じゃなくて心身障害学の範疇じゃないの？

そういう仕事があるということも知らずに受験したとはお恥ずかしい限りであるが、これが正直な気持ちであった。社会では手取り足取り教えてくれる人もいない（場所によってはいるのかもしれない）。見よう見まね、片っ端から本を読み、セミナーやワークショップに参加して手探りで日々を乗り越えていた。

ある日、自閉性障害児対策事業の一環で、講師の先生を招いた。筑波大のＫ教授だった。ああ、この先生の授業、受けたことがある。確かビデオで、療育場面を見た…。

ここで、やっとつながった。授業そのものが目の前に起こっている訳ではない。しかし、障害児の判定も、自閉症児の療育も、心理学の研究や理論を基に築かれているのであり、また、こうした子どもたちの行動観察や実際の対応から、研究が行われ、理論ができているのではなかったか？大学と仕事が結びつき始めた。

数年を経て、精神保健福祉センターへ異動した。ここでは、地域での精神保健福祉事業の拡充を皮切りに、現在は精神保健相談を主に行っている。中でも思春期相談を担当している。

私の卒業論文は、青年心理学の先生方に指導していただいた。思春期といえば、青年期の中に含まれる。いつの間にか、大学時代に最も興味を持った分野に仕事が戻ってきている。

思えば、心理学を専攻しようと決めたのも、人と自分との違いに興味を持ち、友達の悩みに寄り添ったからだった。これまで何となく選択してきたように思えたことも、ちゃんと自分の中に理由があり、今、結果として現れていたのだ。

勿論、大学の勉強だけでは仕事はできない。情報を取り入れたり、臨床家としての技術を磨くのは自分次第だ。そこに、どれだけ大学で学んだことを活かせるか。宿舎での生活、友人関係、サークル活動をも含めた「大学生活」がここにつながってきた。それは、専攻と異なる仕事をしていても同じかもしれない。

「思い出」から「現実」へ

それでもやっぱり、時々思ってしまう。「心理学は思い出にしておけばよかったかな」と。そういう時は決まってうまくいかないとき。「つくば」の淡い思い出に浸っていたいとき…。

（こばやし　みほ／心理判定員）